

児童園だより

第七号

平成二三年九月二七日発行

アルプスピアホームパートナーズ倶楽部の皆さんとの交流

今年は近くの小学校に行き、女の子や低学年男児、幼児さん達は体育館でタイル作成や割り箸鉄砲、泥団子を作りました。中高生や小学校高学年の男の子たちは校庭で野球をやりました。アルプスピアホームの方々と児童園の児童、職員とで混合チームを作って試合を行いました。

野球のルールを知らない子どもたちも周りの大人に教わりながら見様見真似でなんとかバットを振ったり、ボールを投げたりと、とにかく一生懸命やっていました。体育館で工作をしている子どもたちも目を輝かせながら作っていました。

午後は児童園に戻って、アルプスピアホームの方々が用意してくださった焼き肉、トン汁、ポップコーン、おにぎり、綿あめ等をおいしそうに頬張っていました。

松本中央ライオンズクラブさんによる招待

8月上旬に松本中央ライオンズクラブの方々と国営アルプスあづみの公園に行きました。バスを借りて片道約1時間の道のりを経て到着。まずはガイドさんの案内で自然観察をしました。日頃はじっくり木々や昆虫を見ない子どもたちもこの日はガイドさんの説明を一生懸命聞きながら自然というものを身で感じていたと思います。

1時間程歩いたあとはみんなが楽しみにしていた「竹まきパン」。これは用意してあったパンに、自分たちの好きなように好きな具材を入れて細い竹の棒に螺旋状に巻き、自分た



ちで焼くという物です。子どもたちは自分の好きな具材だけを入れて好きなように作っていました。焼いている時はまだかまだかとお腹を空かせて待っていました。

昼食を取った後は、アルプス大草原で林間アスレチックや大草原の家で思いっきり体を動かして遊びました。子どもたちは汗をびっしょりかき、帰りのバスでは疲れて寝ていた子もいました。



野尻湖で初めてのカヌー体験

夏が始まる少し前に、野尻湖で児童園の子どもたちを思いっきり遊ばせてあげたい、夏はカヌーやキャンプ、冬はスキーやワカサギ釣りをとお話をいただき、さっそく小学生の男の子たちがカヌー体験に行ってきました。

1時間程車で走り、野尻湖に到着。午前中にカヌーのレッスンを受ける予定でしたが、子どもたちがあまりにも遊泳スペースが気に入って、楽しそうに遊んでいる姿を見てレッスンの先生も「楽しそうなので午後にしますか」と一言。午前中はとにかく遊泳スペースで職員も含め遊びました。一緒に飛び込んだり、ボールで遊んだり、小さなボートで遊んだり。



昼食はバーベキューでしたが子どもたちは一通り食べてすぐに「もう遊んでいい？」とすぐに遊びに行っていました。午後はお待ちかねのカヌー体験。レッスンを受けていざ湖へ！子どもたちですごいですね。聞くより実践でもにするんです。みんな初心者のはずなのに誰一人ひっくりかえることなく言われた通り目的地まで行くことが出来ました。帰りの車では小さな怪物たちも可愛い寝顔を見せてくれました。



その2週間後には小・中学生の女の子たちが1泊2日のキャンプに行きました。到着後はテントを張り、バーベキューの準備をみんなで行ないました。キャンプの経験が少ない子どもたちでしたが職員の言っことをしっかりと聞き、テキパキと手伝っていました。みんなで作ったバーベキューもお腹いっぱい食べていました。翌日はカヌー体験、これまた

女の子たちも誰一人ひっくりかえることなくみんな上手にできました。よっぽど楽しかったのか「また行きたい！」とのことで9月中旬に野尻湖に行く予定です。今度はどんな思い出を持って帰ってきてくれるのか楽しみです。

東日本大震災後の心の支援

（ 心理療法担当職員 S・N ）

東日本大震災後、被災地の学校に臨床心理士を派遣する事業が実施され、休みをいただいて岩手県大船渡市の小中学校に行ってきました。ちょうど震災から三カ月という、大きな節目の時でした。被災地の皆さんは、なんとか日常生活を取り戻そうと必死で、外部からの心理士を受け入れる余裕など本当はない中で、それでも子どもたちのためになればと、貴重な時間を私たちの活動のために割いて下さいました。今回の辛い体験を通して悪夢を見たり、眠れなくなっていたり、意志に反して興奮状態が続いてしまったり、悲しいはずなのに感情が動かなくなってしまうていたり、様々なトラウマ反応が現れている先生方や子どもたちがいました。

辛い体験をすると、それ乗り越えようと心と体がすごく頑張るんだよ。だからそういう変化が起きてしまうんだよ。あなたがおかしいんじゃない、辛い体験をしたら誰でも変化が起きてしまうんだよ と繰り返し伝え、辛い反応への対処の仕方を授業をしながら子どもたちと学びました。

授業に参加した子どもたちからは、「気持ちが少し軽くなった」や「教わった方法をやってみたい」といった声が聞かれ、今回の活動の意義が感じられました。それと同時にこの活動を通して、現在園で関わっている子どもたちも、様々なトラウマを抱えているということを改めて考えさせられました。被災地の子のみならず、身近にいるトラウマを抱えた子どもたちの心理支援のために、どんな対応が必要かを見直すよい機会にもなりました。

阪神大震災の経験から、災害後のトラウマケアには、非常に長い年月がかかることが分かっています。今回の支援が、今後の回復のきっかけになれば幸いです。

私に被災地支援のチャンスを下さった皆様、快く送り出して下さった園の皆様、心理療法を一週間我慢してくれた子どもたち、本当にありがとうございました。

被災地の復興と皆様の心の回復を心よりお祈り申し上げます。

炊事では毎日、子どもたちの朝・昼・夕の食事と、高校生のお弁当を作っています。今回は、その炊事業務の目線から、子どもたちがどんな風に食生活を送っているかご紹介したいと思います。(小学生以上の子どもたち・平日編です。)

子どもたちは、平日は朝六時に起床し、朝ごはんを食べに食堂に來ます。より気持ちよく食事ができるように、暑い日には食堂を換気して、寒い日にはストーブで温かくして、炊事職員は子どもたちを待ちます。いつも眠そうな顔でやってくる子がほとんどですが、話をしながら朝ごはんを食べているうちに、目が覚めてくるようで、食べ終わった後には、「ごちそうさま」「行ってきます」と、元気に食堂を出て行く子が多いです。なかには遅刻ぎりぎりに起きてばたたと園を出ていく子もいます。食堂に顔を出さない子がいると、ちゃんと起きられたか、私は心配になります。

昼ごはんは、小中学生は学校で給食を食べ、高校生はお弁当を食べます。高校生のお弁当のおかずは職員が作りますが、いつか園を出た時に役立つよう、お弁当を詰めたりお弁当箱を洗ったりするのは、自分でやらしてもらうようにしています。それを面倒くさがる子もいますが、嫌々ながらも最初の頃に比べて詰め方が上手くなっているのを見ると、なんだか嬉しくなります。お弁当だけでは足りないという子は、おにぎりを自分で作って持っていくきます。子どもによって様々な形のおにぎりを作るので、個性が出ていておもしろいです。

夕ごはんの時には、また子どものいろんな顔が見えます。学校での出来事を楽しそうに話してくれる子や、部活やバイトで疲れた顔をしている子、メニューに大喜びする子、がっかりする子、ごはんを早く食べてテレビが見たい子、何回もおかわりする子もいて、ごはんがそれぞれのまた明日への活力になってくれるといいなと私は思います。

このような日常の中で、炊事職員にとって何より嬉しいのはやはり「ごちそうさま」「おいしかった」という子どもたちのひとことです。これから、そのひとことを子どもたちにたくさん言ってもらえるよう、日々努力していきたいと思っています。

最後に、日頃野菜や果物、お菓子等を寄付してくださっている方に、なかなかお礼がでないので、この場を借りてお礼申し上げます。頂いた寄付、子どもたちは喜んで食べています。本当にありがとうございます。